巻頭言

インバウンド観光新時代の到来と「東京五輪 2020」

石井　昭夫
観光研究家
元帝京大学観光経営学科教授

2013 年に初めて訪日客数が 1000 万人の大台を超えたのに続き、2014 年には、さらに前年比 30%も増えて、1341 万人に達したという。訪日外客増の大きなうねりを実感させる結果である。それだけでも充分マスコミに採り上げられる価値があるのに、2020 年の東京オリンピック・パラリンピック大会開催への関心と期待が合わさって、早くもテレビや新聞が盛り上がっている。これまでインバウンド観光に興味を示さなかった普通の人々までが、当然のように来訪外客増を話題にする昨今である。これから 2020 年に向けて、年々盛り上がっていくのであろう。長らく低迷が続いてきたインバウンド観光が世の脚光を浴びることは、インバウンド観光に携わってきた者として喜ばしい限りである。

2013 年から 2015 年にかけての状況は、インバウンド観光の新時代の到来をはっきりと告げている。「新時代」というからには、それ以前とは不連続の展開を示す展望がなければならないが、では、何がこれまでと違うのか。第一は、やはり訪日外客の目を見張る増加である。本来「イン」と「アウト」の対比では、インがアウトを上回るのが自然なのだが、日本の場合、これまで近隣諸国の観光客送り出しの力が弱かったために、アウトがインを大きく上回る状態が続いていた。しかし、今アジア諸国の経済発展がそれを大きく変えようとしている。アウトの方は日本 1 国だけが市場だが、訪日外客の潜在市場は日本を除く全世界だから、ほぼ無尽蔵である。隣国の台湾、韓国、中国、香港からの増加に加え、アセアン諸国や世界の人口大国からの訪日客も増える一方であろう。2020 年の誘致目標とされる訪日外客 2000 万人の大台は案外簡単に到達し、単なる通過点になるかもしれない。

ちなみに、来訪外客数の比較で、フランスの 8000 万人台を筆頭に、数千万人単位の来訪外客を受入れている国を並べ、日本は 30 位以下であると卑下する言説がある。しかし、この比較は適当でない。国際観光客の定義は「1 泊以上 1 年未満滞在する外国人」であって、ヨーロッパ諸国のような陸続きの国への来訪外客は、マイカーやバスや鉄道で入国する国内客並みの外客を大量に含むのだから、数が多いのは当然である。島国日本の来訪客と比較するなら、航空機と船による来訪外客を比較するのが妥当であろう。日頃この比較に違和感をもっていたのだが、平成 26 年度版の「観光白書」が初めて「空路または水路による来訪外客」の比較表を掲載した。これによると、最大はスペインの 4700 万人、2 位が米国の 3800 万人、以下フラン

スの 2800 万人、英国の 2700 万人、中国 2600 万人と続く。このままアジア諸国の経済発展が続けば、日本への来訪外客も遠からず海外旅行者数を超え、いずれ英仏並みの 2000 万人台後半の数字に追いつく日も来るだろう。

第二は、日本の観光産業界に、インバウンド観光客を歓迎する姿勢がはっきり出てきたことである。このことはインバウンド観光の今後の進展にとって極めて重要である。日本は明治以来、言語の相違や文化・習慣の相違ゆえに、外国人観光と国内観光が二重構造になっていた。1970 年代までの訪日客は欧米客が主体で、彼らは高級洋式ホテルに宿泊し、汽車は最上級を使い、ガイドを伴ってハイヤーやタクシーで移動し、国内客と重なることが少なかった。近隣アジア諸国からの訪日客が増え始めた頃には、円高のために日本は割高なデスティネーションとなって、言葉や習慣の相違で余分の手間がかかるうえに単価も安く、敬遠される傾向が強かった。ところが今日では、クールジャパンに係わるマスコミ報道や本誌に掲載されている外国人観光案内所での案内内容などを見ても、来訪外客の日本文化への知識と関心はあらゆる方面に及び、時に日本人を上回っている。ようやく国際観光と国内観光の区別がなくなって、一体化する時代に到達したのである。

少子高齢化による人口減少が想定され、国内観光の伸びが期待薄になってきたこと、巨大な貿易黒字を背景に観光で外貨を稼ぐ必要がなかった好調経済の時代が終わり、国際収支の面でも、雇用創造や産業育成、地方活性化の面でも、観光産業の重要性が認識されるようになったことが背景にある。観光産業界が、これから大きな伸びが期待できる訪日客の受け入れに積極的な姿勢を示すようになり、官民が協力し、観光以外の分野を含むオールジャパンでインバウンド観光の振興に取り組もうとするエネルギーが生まれつつあった。そこへ東京五輪 2020 の開催決定である。開催地決定の IOC 委員会の席では、外客をへだてなく歓迎する日本人のオモテナシ精神が内外に大きくアピールされた。東京五輪 2020 は、急成長を始めた日本のインバウンド観光にとって、素晴らしい追い風になるであろう。

危惧があるとすれば、戦後 70 年という節目の年を迎え、なお韓国と中国の対日感情の悪化が解消されそうにないことである。前回のオリンピック・ロンドン大会でも、その前の北京大会でも、開会式の式典では、自国の歴史と地理と文化を誇らしく、華やかに映像化して世界にアピールしてみせた。東京大会では、島国日本が国家成立以前から中国と朝鮮半島から多くを学び、成長してきた歴史を紹介することになるだろう。近現代の近隣諸国との関係についても、新しい時代にふさわしい採り上げ方を期待したい。

「平和の祭典オリンピック」は今の日本に最もふさわしい国際イベントである。海外諸国とのさらなる友好親善の心をはぐくむ好機であり、その成功は必ず世界平和に貢献するであろう。国民とともに、観光産業が、「オモテナシ」の力量を存分に発揮することを期待しよう。